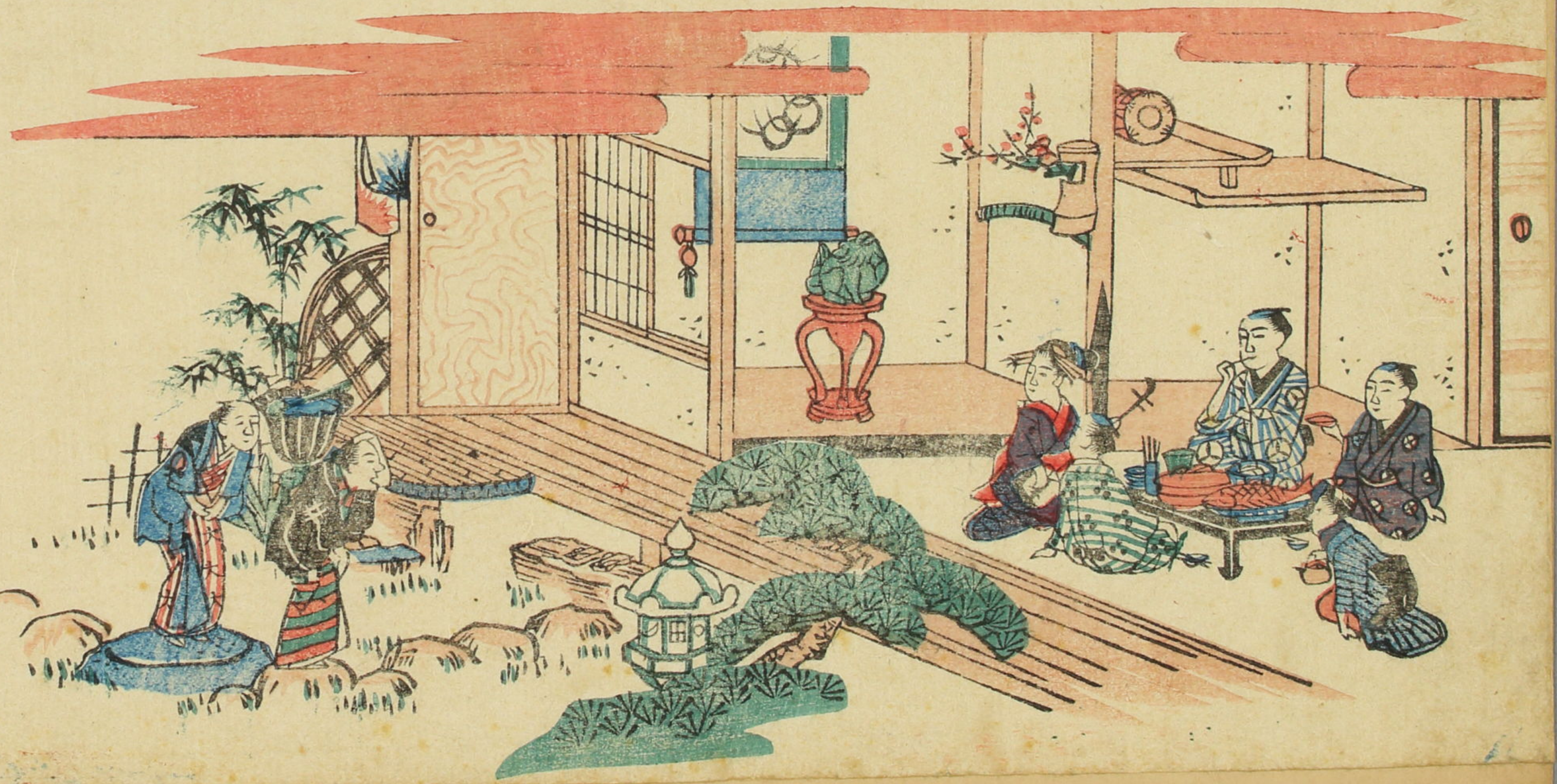
新ぱん 閨法じくし十二の道

そのむかしへ嫁ると　ありや
なども　むかまし　肉書　雛
○金の鏡あて　浮名ちらして　出ぐ
いろにやまよわぬ　丈夫
なんじあくふもふ閨法の傳に
その上なるし　第一こうん
うらざれきんもなく至る事
きぐりや手ぐんに白ふ　本め
○めしとおりへぞ書のおかうぶ
おんふいさみお　吟楽ぞてぬん
実の気ともそじ　なら間がせさくふ
うれしとりくる知恵の海
まらうさ中あふけて　いつまでも
かくらひうれをのうしまうひ
○ならふ教書しはお経ハえねど
法がふへあちがて　たびやせん
手ふ手引おひ中くられく為
緒くちうひ　の　まいまいり
法のりをやちゃも　君くの三筆
ふくうく　たくく　めく　紙の壁
○紙のむくひろたびこ重ねどの
櫓も　紙さいぬ身の法まうん
たくむお口がらふくい遠くし
あがの昔労も水のかい
その手来名とおりひ味にふ
雪ふ寝ますへ　縮うらべ
○犯後ろのおりひを清正さんへ
孫のひかけての実そくぐ



相浦ぬ法うさと春ふづしくそ
いまれ蛙世のくらと　ある
実をぬくれんふうやくどかれて
茶里落くるてまりふしく
まてよぬるけなる澪つ井伊清ちん
緋く　かおんの　かくつも　性
まへつとみぬいく恋法おきまうと
そうまうへむもぞびし　後のみん
おりひふけあかく吾弟のかくゐ
おみよ　ちくりふきるまるひ家